

の如く、頗る簡潔な形に改められている。我々は、三七八六・三七八七は、歌語りの殆どそのままの反映と見るのだが、それが、目錄において、かくも簡潔な形態に改められた過程には、歌語り(語)が縮約されて表現される際の一つの在り方を示す貴重な資料性があると考えられる。また、巻十三、九オ「相聞」は、目錄では、「相聞歌五十七首」となっている。「相聞歌」の用例は、万葉中この一例のみで、それは、「雑歌」「挽歌」に対して、単に「相聞」と称することに不安定なものを感ずる現代人の心理と同様な心情が奈良朝人にもあったことを物語る、些細ながら尊ぶべき資料であると考えられる。しかるに、本書の脚注は、かくの如き例を無視している。「そのままではほとんど利用価値がない」というのは、我々にとっては、著者の独断としか思われない。

そもそも、目錄は、武田博士・木下氏の研究によって、奈良朝末期には成立したものであることが明らかにされている。その制作者が誰であるかは不明であるにしても、奈良朝末期の作である以上、万葉集二十巻の総合整理の時期とそう著しく離れていないはずである。家持の死んだのが、延暦四年(桓武朝七八五年)であったことを思うと、何らかの形で、家持と密着した線も考えられなくはない。少くとも、それが、「万葉人」の範疇に入る人の制作であることは間違いない。「諸本によって出入り甚しい箇所がある」とは言え、かような目錄を、著者の価値判断によって省略することは、歌の幾つかを落すにも等しい痛烈な処置と言わなければならない。万葉集本文と共に、題詞・左注、そして目錄をも重視して、作品の場や伝来の在り方を探っていくこうとする学徒にとっては、この処置は、極度

に傷ましい英断としか感じられないであろう。先にも述べたように、本書は、その本文校訂において、絶対的な信頼を寄せ得る名著である。本書は、今後長年にわたって、万葉集校訂本の王座に君臨するであろうし、また、君臨しなければならぬ。その本書が、奈良朝末期の成立にかかると、いわば、万葉集の手足の一つとも称すべき目錄を削除したとあつては、本文研究に片寄りすぎて題詞左注を軽視しがちな万葉研究の悪弊が、ますます助長されはしないかと憂慮される。目錄研究の第一人者を著者に有する本書こそ、「諸本によって出入り甚しい箇所」を有するが故に、目錄にも校訂を加えて、ぜひ、掲載して欲しかったと思う。これは、歌だけが万葉集ではないと信ずる者、そして、本書を信じ愛する者の、切実な願いである。(昭和三十九年十月三日)

本稿第二節には、評者が、著者の意図を忖度した箇所が幾つかある。万が一、著者の意図に反する所がある場合は、評者自身の不明及び本評の浅薄なる態度に基づくものとして、寛恕をお願いしたい。

佐竹昭広・木下正俊・小島憲之共著『萬葉集』(昭和38年6月・講書房・520p・八二〇円)。

共著者・木下正俊氏は、本学助教教授。

共著者・小島憲之氏は、前本学(非常勤)講師、現職・大阪市立大学教授・文学博士。

校合並びに校正協力者・神堀忍氏は、本学大学院修士課程国語及国文学専攻昭和31年修了、現職・帝塚山学院短期大学助教教授。

## 大西昭男・多田敏男訳『ヘンリー・ジェイムズ短篇集』書評

西村 徹

翻訳ははかないなどと言われる。世に名訳と謳われても十年の命脈を保てばよいなども聞く。そしてそのはかなさをそのまま受け入れて横文字を縦文字に、ただ置き換える作業に専念する、しかも迅速と量産に専念する、いわゆる翻訳工場式の割りきったやり方もあるにはある。たしかにインスタントばかりの今日此頃は翻訳とい

えばまずこの種のものが多いだろう。またなるほどそれでも翻訳であることにはまちがいない。大方の会社などで商用文を翻訳するならば当然そういうものになるだろう。しかし文学の翻訳となるといささか事情はちがうだろう。そしてさらに文学の翻訳からは翻訳という二次性を脱して翻訳文学という独立性さえ可能となるのだ。外国文学の端的な摂取に出発点を見いだした吾国近代の文学史がそのことを例証している。その可能性への挑戦こそ翻訳者の栄光ではあるまいか。つまりは原作が作曲なら翻訳は演奏だと私は考える。音楽における演奏家の地位をこそ翻訳者は要求すべきものと私は考える。またそのような抱負に裏打された責任をこそ私は翻訳に要求したい。

難駁な翻訳の氾濫はほとんど絶望していた私に、一体何がそのように高い要求を想い出させたか。それは他ならぬこの『ヘンリー・

ジェイムズ短篇集』であった。

この訳業に接して先ず第一に感じとれるのは、二人の訳者の翻訳に対する姿勢の、先に述べた翻訳者の抱負の、その純粋さである。難解なジェイムズを捻じ伏せたという力業ではなくて、訳者らは心底ジェイムズの作品を愛し、味読して、おのずと結晶した彼ら自身のジェイムズがやみ難く表現を求めたというべきものである。

ジェイムズが難解だとはかねて喧伝されている事実である。あるいは事実以上に喧伝されて伝説化されているむきもあるかもしれない。しかしこの訳業に接したかぎりでは意外にジェイムズが今日の私共にとってアンチチームな存在だとおどろかされた。これはおそろしく作品の選択によるものでもあろうが、それ以上に訳者の読みが充分に熟しているからに他なるまい。いわゆる翻訳調は微塵もなく、こなれた日本語になりきっているためか、ほとんど翻訳と意識せずにするのは、ジェイムズに対する無用の恐怖を払いのけるに有効である。

このように俗耳に入り易い言葉でスムーズに運ばれる訳文はたしかに一般読者には願ってもないことであるが、『視点』など初期の三篇はやや常套句を多用してイーシーに流し過ぎるきらいはないだ

ろうか。おもうに訳者らもこのあたりいわゆる「訳の背負う」はかなさ」におもわず妥協してしまつたのではあるまいか。「おもわず」と言ったが、ひよっとすると承知の上のことかもしれない。どうも原作の英語はここまで軽やかではないように思われるからだ。

しかし私が首を傾げるのはこの点ではない。むしろ莊重を気取つて凝りに凝つたところである。訳者らは豊富な語彙を駆使して一種雅俗混淆の文体を造り上げているが、その語彙の豊富さに勢余つてジェイムズそのものよりはいささか饒舌な文体になっているのではあるまいか。察するに訳者らの幅広い近代日本文学の素養が、訳文の中に拡散して却つて訳文の現代的集約を妨げているのであろうか。世話にくだけた話法の中に、時には世話とも覺しき肩胛はつた言葉が飛び出しておどろくことがある。つまりは翻譯機械の役割にはおさまりきれぬ訳者らの個性が原作という楽譜の枠を破つて溢れてしまつたのであろうから、翻譯が演奏の独自性を荷うものである限りこの程度の勇足はやむを得ないことかもしれない。

しかし一見いささか古臭く擬古的ときえいえる訳者らの文体は、單なる骨董趣味から出たものではなくて、あるいは現代的制約を振りきつてさらに巨視的な地点をうかがうという、途方もない野心のしわざなのかもしれない。なぜなら古いイギリスや古いヨーロッパに憧れたジェイムズ自身、また文体はいささか古風な気取屋であつた彼の文学がひそかに廿世紀文学の源泉として水汲まれながら、広く読者をかちえられなかつたのも一つにはこのことが原因している。つまりジェイムズは新しい酒を古い革袋に盛つたといえる。その点ジョイスやT・S・エリオットの場合に較べ見掛け上の損失は争えない。生前のジェイムズ自身人気とか流行には見切をつけていたの

一篇に関する限り原作よりも気取つているし、少くとも気負つている。「はかなさ」へのはかないレジスタンスの余り、これまたカデツアの聴かせ過ぎになつたのであろうか。

大西昭男・多田敏男訳『ヘンリー・ジェイムズ短篇集』（昭和38

## 平野健次監修解説レコード『上方の端歌』

昭和三十八年の秋、文部省第十八回芸術祭参加のレコードとして、ピクチャーから「上方の端歌」が、ステレオLPレコード30cm盤3枚箱入り一組の形で発売され、芸術祭奨励賞を受けた。監修と解説は平野健次氏である。

上方の端歌は系統の違う二種類がふくまれていたわけであるが、とにかく、地歌とか上方歌の中の重要なジャンルを占めている。ところで、数年前までは、地歌のレコードというものは教えるほどしか出されなかつた。出されるばあいでも、全曲でなく、前半か後半だけが不完全形で出されるのが普通であつた。まして、地歌の歴史などを、レコードによって耳から聴くことは不可能であつたのである。

昭和三十六年、ピクチャーは筆者の監修と解説で「箏曲と地歌の歴史」というレコード集四枚を出したが、それは、地歌だけでも、三

だから当然過ぎる結果かもしれない。ジェイムズ自身どこまで自覚していたかはわからぬが、伝達の形式が持つ価値についてはきわめて懐疑的であつたと、結果としていえるとおもう。むしろそういう価値を拒むことによって伝達の制約を超えようとしたのであろう。百年後の今日彼の文体の古めかしさが何の妨げにもならなくなつていることが、これ又結果として彼の姿勢の正しさを裏書しているだろう。

とすると、この訳業の文体のいささか気になる古めかしさも、あるいはそのことに則してのことであらうか。「途方もない野心のしわざ」と言つたのはその点についてである。とすれば、これも亦ジェイムズの場合同様今のところ損になるだろう。覚悟の上と訳者らは言うだろう。しかし結果は必ずしも覚悟や計算通りに行くものではない。もしこの五篇の中から古さがそのまま新しさであることを感じさせるものを挙げるなら、『ブルックスミス』だろう。郷愁と詠嘆に充ちた原作の肌理が照れかくしのない訳文に見事に生かされて燦銀のように輝いている。原作者がこの一篇に注いだ愛情がそっくりそのまま訳文にしみわたつて読者の胸に伝わってくる。

これが「ヨーロッパ」となるとどこかに食い違いが感じられる。訳者らも「あとがき」に書いてるように、「一種の威厳を湛え、一種の暗い輝きを放つてさえもいる」筈の「リムル夫人の老醜無残の姿」はただグロテスクなだけではない筈である。清教徒氣質の根強さを象徴するこの老女の鬼気迫るおもむきは、いささか凝り過ぎて酒脱でさえある訳文の語り口のために、何やらシニカルに扱われているような錯覚を起こさせる。原作はもつと直線的で、もつと武骨な訳の方がかえつて有効であつたのではあるまいか。とに角この

年9月・（京都市）あぼろん社・262p・三五〇円。

共訳者・大西昭男氏は、本学専門部国語漢文学科昭和22年9月卒業。京都大学文学部英文学科卒業。現職・本学文学部（英文文学科）教授。

吉川英史

味線組歌から、長歌・端歌・手事物・浄瑠璃ものまで含むので、勢い曲数も少なく、まして全曲どころか、各曲三分平均しか吹込めなかつた。従つて、この中の端歌だけを取り、端歌をさらに細かく分類し、録音時間もたっぷり取られている平野氏の「上方の端歌」は、筆者の「箏曲と地歌」に対して、すぐれた各論の役を果たしている関係になる。

少し、楽屋話になるが、ピクチャー会社では、もともと、上方端歌の中の、平野氏が「はやり端歌」と命名した部類に属する曲が、次第にすたれて行くことを惜しみ、それを今のうちに録音し、保存しようと思ひ立つたことが、このレコードの企画の動機であつたらしい。

全く、この「はやり端歌」は、京都や大阪の遊里に伝わつたもので、明朗さにおいては江戸小唄や俗曲などに押され、洪さと品格に